

石船

新春特大号

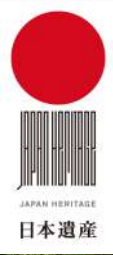
筋肉
賀新年





岩船祭
 2024
 時折強く降る雨をものともせず
 威勢の良い掛け声は夜遅くまで
 岩船の町に響いた





岩船祭は2024年に「北前船日本遺産」の構成文化財になりました

2025



年男年女 今年の抱負



昭和16年生まれ
陣谷 良造

今年で八回目の巳年、常に歳など気にもしないが他人に言われて俺もそんな歳かと寂しい。昔からみれば今の人達は若い。仕事と言えば医者か病院通い、情けない。そんな時小学校卒業の時校長先生から戴いた饞の言葉を思い出す。それは『明日があると思う心の仇桜夜半に嵐の吹かぬものは』というもの、若い頃は別に気にもしなかったが、百歳時代と言われる昨今、後何年も無い残り少ない人生を考えた時この歌のように明日をあてにして今日を疎かに出来ない。一日一日が大切であると知ったからである。

体を壊して約六年、日常生活が楽にのんびりしていたらその為手足の筋力が衰え、座ったり立ったり出来なくなってしまう。今は少しづつ鍛え歩くよう心掛けている。好きな運動や旅行などまだまだ楽しむことが沢山あるからだ。『どうせ持つてなん行がんにゃんせ』を合言葉に日々これからも健康に気をつけて好きな事をして悔いのない人生を送りたいものだ。



昭和28年生まれ
工藤 よし子

『ここまで来たら一日一日を大切に』

六回目の年女、ここまで良く頑張ったと自分を褒めてやりたい。

定年までは本当にイバラの道でした。中間管理職の立場で上から下から：定年の日をひたすら指を折りながら教え、退職したらやりたい事をやるぞ！と。しかし実際は両親・家族の世話で一日が終わるだけ。ある日、六歳の孫に「ちやま（私の呼び名）大きくなったら何になりたいの」と聞かれ「ウーン、幼稚園の先生か福祉の仕事。でもね、ちやまはなりたいたいものに全部なっちゃったの」「ふん、よかったね」今まで仕事や家事、家族に振り回されて、と羨んでいたけれど、なりたいたいものになれて幸せだったんだ。この年になって気付かされ、これからは今ある事に感謝し、一日一日を喜びに変えていきたい。忙しくて暇がない！なんて嘘です。日中は家族・仕事の為に夜が寝てしまっただけの九時から十一時を私の自由な時間として絵を描いたり、人形を作ったり精一杯楽しんでいきます。家族や自分が幸せであること。その為には自分が健康である事が一番！



昭和40年生まれ
鈴木 里美

新年明けましておめでとうございます。新しい年が明けて、今年昭和40年生まれの年女。そして還暦を迎えました。12年に一度訪れる、大切な年となります。

2025年巳年は蛇のイメージから「脱皮を繰り返して、強く成長していく」ことから「再生と変化」「努力を重ね物事を安定させる」といった縁起の良い干支でもあるようです。

まずは還暦ということで今年は体力作りをし、心と体を健康にしてまた60才から再出発を楽しみながら今年一年を過ごしていきたいと思っています。





昭和52年生まれ
小野塚 和太

みなさまこんにちは、きそべのおんちゃま、和太です。初めましての方は、今後ともお見知りおきくださると嬉しいですよ。

2025年は、自身への投資と成長をテーマに掲げ、「自身の家族と一緒に働けるカフェ・バーの開業」に向けて一歩を踏み出したいと考えます。具体的には以下のことを大切に取り組んでいきます。まず、自分自身のスキルアップを図ります。店舗運営や経営に必要な知識を深めるために、書籍・セミナーを活用し、実践的な学びを得ます。

次に、時間とエネルギーを効率的にしながら、家族と向き合う時間も大切にします。妻や子供とのコミュニケーションを深め、彼らがカフェ・バーの運営を楽しめる環境を整えます。「一緒に働く」という未来を共有し、共通の目標として育んでいきます。

さらに、店舗のコンセプト作りや資金計画、場所選びにも具体的に着手します。少しづつで構わないので、小さな成功体験を積み重ねながら開業へと進む準備を一つづつ整えます。

「自分らしいカフェ・バー」

優しさが溢れる空間を形にするために、日々を丁寧に積み重ね、一歩ずつ前進します。来年は夢の実現に向けた土台作りの年にし、成長を楽しみながら挑戦していききたいと思います。



平成元年生まれ
佐久間 陽

皆さま、あけましておめでとうございます。平成元年生まれ、岩船の縦新町育ちの佐久間陽です。当時できたばかりだった村上中等教育学校の一期生となり、東京の大学へ進学し、石川県の大学院や、長岡の建設会社で3年の修業を経た後に、故郷の岩船へ戻ってきたのが2017年のことでした。親の経営していた(株)サクマで、昨年の10月に社長に就任させていただきました。

(株)サクマは、1894年の創業から、昨年で130周年となりました。創業当初は海運業等を営んでいて、今では建設業の中でも水道・電気・ガス等の設備工事業や、LPガスや燃料販売、ガソリンスタンドを営んでいます。創業時からやることは変わっても続けて来られたのは、お客様の生活に役立つことを大事にしてきたこともあり、何よりも地元の皆様のご愛顧あつてこそだと思えます。人口減少、物価高騰など課題の山積する昨今ではあります。これまでお世話になった地域に貢献し続けられるよう、また年男である本年が飛躍の年とできるように、公私ともに頑張っていきたいと思えます。



平成13年生まれ
増田 瑠聖

『2024年のまとめと2025年の抱負』

今、私は東京のIT企業で働いています。その会社では主に自社パッケージのアプリの販売、開発を行っております。

2024年は新入社員として、IT未経験で右も左もわからない中、4ヶ月の研修に励みました。その後は、新パッケージ開発のプロジェクトの一員として商品の仕様や、開発の仕方などを学びながら実際に開発に取り組みました。

また、資格も5つ取らなければならぬのでその資格の勉強及び受験を同時進行で進む必要がありました。一つしか取ることでできませんでした。

2025年の抱負としては、まだ取れていない4つの資格の取得と、完成の締め切りが間近に迫っている開発の自分の任されている所を責任をもって終わらせることです。そして、完成した新パッケージを扱う同会社の別部署の方々や、それを購入されるお客様に明確な説明が出来るように、製品の理解度と、プログラミング自体の理解度を上げていきたいと思います。



平成25年生まれ
渡邊 一花

『今年行きたい場所 がんばること』

今年2025年は、私は年女で、六年生でもある年です。今年私が行きたい場所が二つ、がんばることが三つあります。

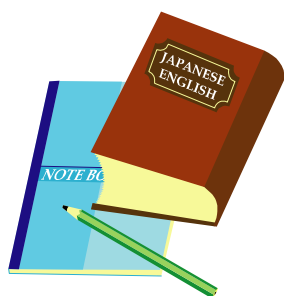
私が行きたい場所は、デイズニードです。私は一回も行ったことがないし、私が好きで「アナと雪の女王」のエリアに行ってみたくらいからです。

二つ目は今年、韓国に行くので、韓国の有名な場所、すてきな場所に行ってみたくいです。

がんばりたいことは、今年六年生で、最高学年なので、低学年や中学年の見本になるようにがんばりたいです。

二つ目はお祭りです。私の町内の上浜町では、最後のめんだいこなので、みんなががんばりたいです。そして、楽しみたいです。

三つめは勉強です。六年生の勉強で特に算数がむずかしいと思うので、五年生の内にたくさん復習、予習をしたいです。



岩船中学校 イワカツ!

12月2日岩船中学校にてイワカツ！発表会が行われた。イワカツとは「岩船のためにできる活動」という意味があり、1年生から3年生までの縦割り班でそれぞれテーマを決めて活動してきた。発表会には保護者のほか、活動に協力した地域住民も駆けつけ、生徒たちの様々な活動発表に興味深く聞き入っていた。



僕たちの班は「岩船都市伝説イワカツ」を調査しました。この話は岩船が昔々、大晦日に岩船にやってきた旅人が思いがけず大金を手にし、畑と松林を買いしめ、大きな屋敷を建てて長者と呼ばれるようになった。ある日、都への用を思い立った男は千両箱30個を庭の大きな男松の根元へ埋めて出発した。しかし運悪く旅の途中で病気になって死んでしまった。今も長者屋敷には長者が埋めた小判が眠っている」という話です。まず一番気になったのは千両箱30個とはいくらかになるのかということ。一両は現在約13万円ほどの価値があり、千両は約一億三千万円、それが30個となると合計約39億円にもなります。それを知り僕たちはますます興味を湧きました。本の中にある地形のキーワードをもとに仮説を立て、ダウジングやアプリを用いて探索しました。千両箱を見つけることはできませんでしたが、調べていく過程はワクワクし、ロマンを感じながら活動できました。そして何より、地元の今まで知らないことを知るといえるのもとても楽しかったです。これからの様々な形でもっと岩船を知って、もっと岩船を好きになりたいです。



小田 帆高

私が2年生のときから始まったイワカツは今回で私にとっては最後で、成功させて終わらせることができませんでした。しかし、成功の裏には苦労も多くありました。例えば「班をまとめること」や「予定の作成やそれにあつた動きの確認」など学校生活の中でこれらを行ったりするのはとても大変でしたがその分「いい結果、いい発表」を残すことができました。また、イワカツの各班的な発表で多くの人が岩船について楽しみながら深く知ることができ、関心も高められたと思います。このイワカツで私達が調べたことは今後岩船の伝統や文化などを残していく過程で必ず役に立つと思うので、調べたことを生かし、岩船の形を守りましょう。



斉藤 丈



今年も同じ時期に3回目の発表会があるという。岩船中の方々の足運んでいただきたい。岩中の生徒！先生方！に拍手を送りたい！



渡辺 潔

「イワカツ」最高！「岩中」最高！12月2日に岩船中学校で「イワカツ」の発表会があった。実に面白い、素晴らしい発表会であった。この発表会は昨年続き2回目だ。「イワカツ」とは岩船の文化や食も含めた岩船のすべてを中学生の切り口で岩船に特化して調べる活動のことを言う。私としては岩船の皆様から見てもらいたいような発表会だった。笑いあり感動あり、そして今の中学生の知的レベルの高さを感じさせるものだった。この活動に着目出来たのは、先生方の岩船に対する目線も大きい要因と言っていいたい。先生方が岩船は調べ研究する値がある地域だと感じてくれたことがこの活動に繋がったものと思われる。

イワフネNo.1



津島重敏

サロメチールとレモンの香り

〜陸上部の思い出〜

何故か、広報の原稿依頼をいただいた、中学時代の事などを書けば良いらしい。

岩船中学校の教務室脇廊下に「岩船中学校歴代陸上競技記録保持者一覧」という板が掲示されており、その真ん中あたりに「昭和49年110mハードル」という木札が掛けられている。当時男子ハードル競技は、100mだった気がするが今となっては自分の記憶に自信がない。

しかし50年前の自分の記録が残っているのは、光栄なことではある。遠い記憶を追いかけると、次々と当時のことを思い出す。

峯田先生

入学したての頃、同級生を集めて校内ばいをやった。新入生が我が物顔で大暴れしたのだから、教務室に首謀者として呼び出されて、担任の峯田先生に出席板を縦にしてガツンと一発いただいた。その時、「お前は陸上部に入ったようだが、走れ、兎に角走れ、バカと言われるほど走れ」と言われた、それで、いつもくたくたになるまで走った。先生ありがとう。

松崎先生

村上大祭の日は半ドンだったが、練習させられた。頭痛で休みたいと申し出ると「走れば治る」と言われた。走ると治った、先生はお見通しである。

県大会

岩船町駅集合、私と同級の鉄也は校旗の竹竿を持って自転車で急いでいたが、新飯田に差掛った時汽車が入ってきた。先生は、「今来るから、少し待ってくれ」と列車の出發を遅らせた。今となっては、信じられない。先生ありがとう。

竹内先生

3年生になって、突然ハードルをやれと言われた。100m、200mでは、一番取れないだろうし、何とかお前に一番を取らせてたくてハードルに出させたと30年後くらいにきいた。先生ありがとう。

郡市大会または下越大会

決勝の時ハードルが突風で3基ほど倒れたが、ハードルがあるように、跳び越えながら走った。優勝して、岩中のテントに帰っていくと、「お前馬鹿じゃないか、そのまま走り抜ければもう1秒速くなったのに」と叱られた。テントの中は、サロメチールと、引率で来ていた斎藤先生が用意してきてくれたレモンの香りがした。

ぼうず先輩・オズマ先輩

1年の時の陸上部部長は佐藤さんだったが、同級生からぼうず君と呼ばれていた、私たち後輩もそう呼んでいた。真摯に努力を惜しまない人で、永遠の部長である。

また東先輩(女性)は、筋肉質で日焼けして、パワフルでカラッとした性格でカッコよかった。巨人の星に登場したアームストロングオズマに因んで、オズマと呼ばれていた。オズマの真似をして、巾着式のバッグを買って試合に行ったが、意外と使いにくかった。

同級生

同級の陸上部員は8人位だったが、しばらく会っていない人もいる。50年経った今、みんなどうしているだろう、また会いたいと思う。

先生不在

先生不在の部活、責任者は部長の自分と思っていた。先生がいないので、走る

のはやめて楽しい走高跳をした。

1年生の大宅君は、おそらく初めて陸上用スパイクをはいて走高跳をしていたが、自分のスパイクが腕に接触して、怪我をしてしまった。幸い大した怪我でもなかったが、責任を感じて自宅まで送って行った。そんな大宅君と先日コンビニで一緒になり、俺たちも年を取ったものだね、と話をし、別れ際に、「高跳びするときは、スパイクで怪我をしないように！」と言ったら、ニコッと笑った。

私の体力の大部分は、その3年間で蓄えられた。その貯金を切り崩しながら、いままで生きてきたのだと感じる。お世話になった先生方、先輩方、同級生、後輩たち、そして岩船中学校には本当に感謝している。

現在、そんな岩中も少子化で統合の話が進んでいる、残念だが現実問題として捉えなくてはならないだろう。

岩船地区もマイナスベクトルを感じる中で、少しでも元気な岩船でいられるよう、垣根を越えてオール岩船で、頑張っていかなければならないと思う。

そんな想いもあり、この機会に「岩船中学校歴代陸上競技記録保持者一覧」の方々に声をかけて集まってみたく、と思っている。会を作り、飲み会でも出来たら楽しいのではないかと思っている。

役場小路だより

第一回 上大町生まれ



上大町に生まれ育つというのは、ひどく贅沢なことだったらしい。

明治末年生まれの、曾祖母の時代の話である。私の生まれた家は、役場小路と名づけられた坂の上、上大町と上浜町の境界にあるのだが、油屋様から土地を買い、新住所登記をする際、曾祖母は上大町でなければならぬと言つて譲らなかつたそうだ。

新年にちなんだ風物詩を挙げれば、岩船には「左義長」があるけれど、上大町にはそれがない。七夕の「十二灯送り」の船もなく、わが家の場合、お隣の上浜町に精霊馬を委託する。子どもの頃はさびしかったが、お祭りのときに黄色い袴と袴を着せてもらえるのは、お待みたいで誇らしかつた。屋台の上台には福福とした大黒天を戴き、見送りの鶴と亀の背後には、フランネルの赤い日の出を貼っている。こうした特徴はすべて、上大町に蔵持ちの資産家が揃い、「大名町」と呼ばれた過ぎし日の名残りなのだそうだ（斎藤誠一『石船神社と船霊まつり』）。

十月の空に一日中響きわたる太鼓と鉦、笛の音の典雅な余韻——。私たちが愛するあの祭囃子にも、上大町、そして「聞くは新町」こと惣新町が大きく関わっていると、最近伺つた。江戸時代、この二町内が出資して才能ある若者たちを京都に派遣し、京ぶりの音楽を当地に伝えたというのである。いつの時代も、音楽は富の下で花開く。そうした岩船の繁栄の源をたどれば、北前船の話などにつながっていくのだが、今回はこのあたりに

しておこう。

私は長年、東京で音楽ライターを生業にしてきたが、四半世紀を経て岩船に戻り、今はあちらと往来しながら小説を書いている。当初は二年間のサブタイカル（研究休暇）のつもりだったのに、「旅の人」になってあらためて知る岩船は驚きと魅力に満ちていて、予定は大幅に書き換えられてしまった。

最大の魅力の一つが、この町に鉦脈のように眠る歴史である。歴史というとかつての授業を思い出して敬遠する方も多いが、ちよつと気をつけて見渡せば、重層的に降り積もつた文化の一端が、私たちの暮らしのそここに秘められている。

郷土史家の皆さんのお話や、岩船甚句保存会、北前船研究会での活動はもちろん、八十八歳の祖母の昔語りも、世間話に出てくる家々の屋号も、すべてが歴史、私の物語の種である。ちよつと十年ほど前、本誌創刊号に岩船大祭についての手記を寄稿させていただいたが、そのときよりはるかに綿密であざやかな「岩船史」が、いま私の中にはある。それを形に残すため、こちらで覚書きをしていこうと思う。

役場小路より愛をこめて。どうぞよろしくお願ひいたします。



高野麻衣●作家。上智大学文学部史学科卒業後、音楽雑誌記者を経て独立。カルチャーライターとして雑誌やラジオに寄稿・出演するほか、小説『F ショパンとリスト』（集英社文庫）など、音楽や歴史人物にまつわる物語を数多く執筆・講演している。ホームページ：<https://mai-takano.com/>



輝け！未来のアスリート

今は強化指定選手の育成枠で世界で活躍しているスケーターと一緒にトレーニングにも参加させて頂いてます。これからも頑張っていきたいと思えます。

東海林希胡

お姉ちゃんがスケボーやっていたので、気付いたらスケートボードに乗っていたような感じでスケートパークで滑っています。毎週あるスクールに通いながら最近はずつと大会にも出るようになって、それにむけて練習したりしています。

東海林和胡

4歳くらいの時に、いこいの森へ遊びに行ったついでにスケートパークに行ったのがきっかけでスケートボードをはじめました。まだ前の古いスケートパークのときで週一回の水曜初心者スクールに通って滑っているくらいでしたが、新しいスケートパークが出来てからは週の半分くらいは通うようになり大会とかにも挑戦するようになりました。

村上のスケートパークは全国からいろんなスケーターが滑りに来てくれるので、地元以外の友達や大人の友達などができて仲良く滑っています。冬は暖かいスケートパーク。これからもよろしくお願ひします！

私の趣味・コレクション

加治秀光



ます。それぞれに用途や良さがあつて使い分けしている・・・と、言い訳です。

昔から何かを作るといふのが好きで、保育園の年長の時にガンダムのプラモデルを初めて作りました。プラモデルが完成した時の感動を今でも覚えています。

学生時代はバイト代の殆どを当時乗っていたバイクに注ぎ込んでいました。峠を走っては転んで、直して。エンジンが壊れては直して、調整。失敗と成功を繰り返して、その時はただただ楽しくて、バイクを速く走らせる為に試行錯誤を繰り返していた日々でした。こんな幼少期や学生時代の経験が今の自分を作っているのだと思います。

2024年、40万キロ走った自分の車をレストアしました。レストアとは年数を経て

2023年、新築を機に念願のガレージを手に入れました。バイクや車が好きでガレージには数台のバイクと車が並びます。バイクが多いので時折「バイク屋さんですか？」こんな質問をよくいただきます。家族が多いので車は多いのですが、バイクの台数は普通の人が見たら異常ですね。家族や知人には「こんなにバイクいる？」なんて言われますが、そんな時は決まって「靴と一緒に」と答え

劣化や故障した車両を修復・復元させることです。現状では経年劣化で車検通過も厳しい状態でした。ちょうどいい機会でしたし、一生に一度でいいから車を丸々一台作ってみたかったんです。エンジンから車体の全てを修理、組み立てを行いました。完成後にエンジンが掛かった時は感動です。自分で組み立てたエンジン、車体で公道を走るわけですから、ドキドキと不安、優越感、自己満足で

したがとてもいい経験になりました。最近ではバイクや車の修理、カスタムの依頼をよくいただきます。販売ではないので趣味の延長として対応させていただいています。車のタイヤ組替、交換からバイクカスタム等、興味あれば遠慮なくご相談いただければと思います。



令和七年 左義長



いわふねもん



安宅 謙

早いもので、私が岩船港鮮魚センターに勤めて44年の時が流れました。地元に残りたい気持ちで就職先を探していた高校三年生の時、進路指導の先生に「まだ建物も無く、これから事業が始まる協同組合があるのが、どうだ、受けてみないか」と紹介されたのが始まりです。何となく軽い気持ちで（失礼な話ですが）面接を受けました。それからとんとん拍子で話が進み、あっという間に生涯の職場が決まりました。



現在は株式会社になりましたが、設立時は岩船港鮮魚事業協同組合という組合組織からのスタートでした。ただ、やっていることは町の魚屋と同じです。一年目の会社なので、歳の近い先輩はいません。魚屋の店主が先輩でした。そんな先輩が手取足取り魚の捌き方や売り方を丁寧に教えてくれることも無く、魚の卸し方は見よう見まねで覚え、売り方のマニュアルも無いので、自分で考えたり工夫したりしながら、毎日接客をこなしていました。日中の魚売りが終わると息をつく暇も無く岩船港へ魚の買い付けに向かいました。時には寝屋や鼠ヶ関まで魚を取りに行くこともありました。その頃は漁船も多く、水揚げも有り、行商のお母さん達もたくさんいて、とても活気があり、セリが各港で連日連夜行われていました。セリが終わり、魚の積み込みと会社の冷蔵庫への搬入が終わり、ようやく家に帰れば、日付は変わっていました。翌日は朝6時頃からの出勤。週一の休日は、人が足りず休めず、休めてもせいぜい半日でした。若さに任せ、がむしゃらに勢いで毎日仕事に向き合っていました。そういう時代でした。

ところで、今、岩船港の現状はどうなのか、改めて考えてみると、漁船の数は減り、水揚げも激減しています。岩船地区にとって、とても大切な産業である漁業としての岩船港がこの先どうなるのか、関係者は希望より不安が大きくなっているのではないのでしょうか。

しかし、若い人達も地元漁師として、また他地域から通っている漁師の方々もいます。魅力ある職業として、これからも漁師になりたいと思う若い人達がどんどん増え、新しい風が吹き、岩船港が再び活気ある港として復活出来るポテンシャルは絶対に秘めていると思います。

例えば、岩船港のブランドである「白皇平目」や、「血抜き神経締め」などの特別な魚。それだけでは無く、他の港には無い、岩船港だけの強みをこれからどう作り上げ、広げていけるか、それは漁師の皆さんだけの問題では無いはずです。漁協や仲買人、我々小売り関係者が、どうそこに協力していけるか、どう共に歩んでいけるか、それぞれが一丸となり、取り組んでいかねばならぬ事のひとつです。



また、雑魚と呼ばれる未利用魚が、沖で捨てられることもあります。そういう魚を、どうにかして利用できないのか、美味しい出汁を取る魚にならないのか、加工してペットフードにはならないのか、色々なアイデアもありそうです。また、育てる漁業に着手出来るかどうか。漁獲量がどんどん減って行く中、無いことを嘆くより、有る魚に目を向け、養殖などの仕組みを考え、それを広げる取り組みを共に考えていくことが、これからは必要なのではないでしょうか。

村上胎内沖の洋上風力発電が5年後には稼働します。メンテナンス港としての岩船港の役割、工業港としての価値、それに伴う岩船地域の発展と責任。今だけではなく、何十年先の岩船の在り方をしっかりと考えること。

明るい岩船の未来のために、難しいことはさておき、まずは皆で「やってみること」が大切だと思います。



若連中 受け継がれる絆

若連中退会にあたって

岸見寺町 丸山 裕樹

この度、若連中を退会することになり、令和七年元日に退会式を挙げて頂きました。少子化の影響により退会年齢が数えの四十二歳から満年齢の五十歳まで約十年間延長されたことに加え、私の場合は祭りに法被を着ることから木遣り上げる立場になったこと、町内の会計という重役を担うことになったこと、もあり、退会にあたってそこまでの思い入れはないものかと思っていました。やはりそこはタロゼミの子、最後に若連中の皆さんから送っていただくときには感動で涙があふれてしまいました。



これからの若連中を考えたときに、確かに若い人たちは残念ながら存在していませんが、これから退会していく人たちも多々いるなあとと思うと、これまでのような若連中としての存続は難しいのだろうと感じています。

そしてそれは岸見寺町だけでなく岩船の他町内や村上・瀬波等の他地区の皆さんも同じような課題を抱えているのだろうと想像されます。つまりは岩船だけの問題ではなく、他の地域の皆さんと一緒に課題を解決するための方策を考えて話し合っていかなければ、存続すら難しいことだと思っております。そう考えると、若連中を退会したから終わりではなく、これから一緒に考えていく町内の一員でなければならないと思いを新たにしているところです。

人生の一つの区切りとして、若連中を退会することになりましたが、これまでつつがなく務められたのは、偉大な諸先輩方・地域の皆さんをはじめ、何回も楽しい酒を飲み交わした気の置けない仲間たち、慕ってくれた後輩たち、そして何よりも家族の支えがあったからだと感謝し、これまでお世話になった皆さんに御礼を申し上げます。ありがとうございました。



石割☆ヒロキ探検隊 最終回

最終回

ご無沙汰をしております。石割☆ヒロキ探検隊です。早いもので最初の掲載から9年もの時が流れました。その間に私自身も家庭をもち、家族が増え、ふと自分の先祖が気になり始めました。そこで思い出したのが一発目？の探検隊のテーマで石船神社の裏山について当時の宮司さんに話を聞いたことでした。その際に現在の社殿の棟札を見せてもらい、そこに当時の氏子惣代とし『石割寅太郎』という名前がありました。苗字からして間違いなく私の祖先だということを感じてはいましたが初めて聞いた名前であり、家族に聞いても誰もわかりませんでした。お盆に本家へ行った際、長押に飾られている先祖の写真を眺めながら自分との関係を聞いてみると、間違えて余分に取った戸籍謄本がありその資料をもらうことができました。昔の戸籍

は現在の内容と違い家単位での表記となっており当時その家に住んでいた一族の関係が記載されているものでした。それを基に家系図を作成してみると5代前まで遡ることができ、そこに『石割寅太郎』の名前がありました。詳細は確認できませんでしたが子供の生年月日から推測すると幕末時代を生きた人物になります。時代を遡って自分の親戚を想像するとワクワクしますよね！なんかコマ

ン感じます。

今回の探検は「時間」でした。

家族や近所の人達に昔の話を聞いてみるといつもと違う考え方が生まれたり発見することができるとも思いませんね！また子供や孫にそんな話しをしながら岩船の良いところを伝えていってほしいなとも思っています。

今の時代に生まれ、この岩船の地域で育ち、家族や友人、知人、職場など私と関わる方々の出会いには意味があります。改めて人との繋がりに感謝しつつこの先も楽しんでいきたいと思えました。

最後にみなさんにご報告となりますが、今回をもって石割☆ヒロキ探検隊9年の歴史に幕を閉じる事になりました。身近にあるものについて新たな発見ができたり普段とは違う視点で岩船を見る良い機会となりました。探検隊は終わりますがこれからもいろんな視点をもってこの地域で暮らしていきたいと思っております。ありがとうございました！



ポエム山本の

独り言



謹賀新年

新年明けましておめでとう御座います。いよいよ2025！ノストラダムスの大予言や2000年問題で不安になってたあの時からもう四半世紀。あの頃はまだまだ多感な少年だった：

どうも！おじさんになった山本です！今年は「巳年」年男、年女の皆さんおめでとうござ

います。巳年は知的で粘り強い方が多いそうです。十二支に数えられている蛇。実は日本人にとってはなかなか縁が深い生き物なんです。

古くは縄文時代より神として崇められていた蛇。多産で生命力に溢れ自分よりも何倍も大きな身体をもつ相手です。倒す毒を持ったものも。縄文時代の土器にも蛇が描かれている事から厳しい自然の中で狩りをしながら生きていた縄文人にはあやかりたい力の

象徴でもあったのでしよう。縄文人の平均年齢は30歳ほどだったそうで脱皮を繰り返す蛇は復活と再生を司る不死の力があるようにも思えたのではないのでしょうか。

時が経つにつれ大陸から農耕文化が伝わり狩猟の時代が終わりを告げ、人々が食料や財を蓄えるようになった頃、備蓄した食料などを食い荒らすネズミは日本人の新たな敵だった。そのネズミを駆逐する守り神としてその後は崇拜されてきました。金運や財の守り神というのはどうやらこの頃からだそうですね。昔は田畑に立っていたカカシも実はルーツは蛇。カカシの本足は尻尾を、蓑笠は蛇の頭部を表しているのだとか。「カカ」や「カガ」とは古来より日本で「蛇」を意味する語でもあるとされ「鏡」や皆さんもお正月に食べたであろう「鏡餅」なんかも蛇がトグロを巻いている姿なんだとか。（諸説あります）神社や神棚にある「縄も蛇

の交尾を表し子孫繁栄や魔除けの意味合いもあるんだとか。ちなみに弁天様のお使いでもあるとされる蛇。私、中学生の頃に下大町の弁天様の石垣で交尾をしている蛇を見た事があります。まさか「縄」のように巻きついているんです。蛇は危険を感じると臭腺というところからくさくさい液を出すのですが、学術的好奇心に駆られイタズラをしたところまんまと手につけられて一週間以上臭いが落ちませんでした（笑）くれぐれも読者の方々に私と同じ知的好奇心を持つ方がいたら素手では触らない方が良いでしょう！（笑）今年はずいぶん蛇にあやかって生命力に溢れて財運に恵まれた素敵な一年に致しまししょう。それではまた。



JUN'S キッチン



豆腐寄せ



材料 <下準備>

- ・木綿豆腐 200g・・・お湯でゆがきザルにあげておく
- ・棒かてん 1本・・・たっぷりの水で戻しておく
- ・にんじん 20g・・・1センチ程度の細い千切り
- ・乾燥ひじき 2g・・・水で戻し、長いものは1センチ程度に切っておく
- ・干し椎茸 2枚・・・水で戻し5ミリ角のみじん切り（戻し汁はとっておく）
- ・くるみ 30g・・・細かく刻んでおく
- ・砂糖 160g
- ・醤油 小さじ1
- ・塩 少々



①椎茸の戻し汁に醤油・みりん（分量外）を適量入れ、下準備したにんじん・ひじき・椎茸を煮る。煮えたらザルにあげて煮汁を切る。

②戻しておいた棒かてんの水を絞り、水300ccと共に火にかけ煮溶かす。

③溶けたかてんに砂糖と①を加え弱火で混ぜ合わせる。さらに下茹でした豆腐を細かくちぎりながら加え醤油・塩で味を整え、最後にくるみを入れ混ぜ合わせる。

④鍋より一回り大きいボウルに水を張り、そこで鍋底を冷やしながらか熱をとる。

この際も混ぜる手を休めない。（※熱うちに型に入れると具が沈み均一に仕上がらないため、か熱を取ってから固めるのがポイントです）

⑤温度がさがりトロみがついてきたら、水で濡らした型に入れ、表面を平らに整える。完全に固まるまで冷蔵庫で冷やしたら完成。



今回は15cm×14cmの型を使用重箱などで代用できます。